



短篇小説

田山花袋選

暗き家 (一巻)

岩代須賀 水野 仙子

今十一時が鳴つたところだ。いつもならもう夜中なのだが、今夜はなんとなく胸が躍つて、つひ机の前に坐つてしまひました。書けるところまで書いて見ますからね、常々見たいと仰言つた東北の、一田舎町の、私の家の近邊を思ひ下さいまし。十二月の廿一日、華子より、都なる郁子様へ。

時計は五分前を報じたけれども、見上げて慥かめるそれさへ得せぬ静かな宵であつた。無念無想とでも言

はうか、眼はたい編物の針先を辿つて、白と緑と、縫れて轉ぶ糸玉の、兎もすれば指に重きを意識するか、目先に揺れる前髪の後れ毛を、搔きあげやうともしなかつた。軒下に佇んで居るらしい子守の唄も夢のやう、赤兒の泣く聲も哀れとも煩さいとも感せず、唯泣いて居るなとばかり、それも何時頃からも知らなかつた。店には小僧共が夜職の巻紙繰ぎ、音さらりと静かである。鳴り出した時計を、數へるでもなく數へぬでもなく數へて見ると、八つで止つた。向ひ合つて一疊を横に隔てつ、綴ち糸の赤い更紗の坐蒲團のぬくみは冷えて、夢に驚いた兒を賺すとて部屋に入つた嫂は音もない。母は炬燵に本を讀んでゐる。

『あらまあ！ 眞つ白だ！』

お客があるらしく、賑はつてゐた隣家の裏所に、笑ひ聲が止んだと思ふと、戸を繰る音して嫁さんの驚き聲にはじめて外は雪と知つた。雪と知つて今宵の静かさも解せた。血を見てはじめて疼痛を覺ゆるやうに、寒さは襟許から襲つて來た。風は音もなく、障子の猫くいをすうと引く。

『雪降つてんですつてね』
母に云ふとなく私に云ふとなく、嫂は靜かに部屋を出て來た。

『さうかや』
母の答は簡に、頁を反して猶讀み續ける。嫂が膝に擴げた繪甲斐絹の、縫ふ手につれてしゅう／＼と音をたてるのを、私は恍惚と聞いて居たが、一しきり火の付いたやうに泣き出した赤兒の聲を、はじめて煩さいと思つたのであつた。

『何家の赤兒ぢや』
障子引き寄せて母が口を切つた。

『加登屋、慥か加登屋の赤兒ですべ』
私は黙つて編物の手を止めて、長火鉢の猫板に肘をかける。カタと鼠らしい音にふと目をあげると、神棚の燈明一つは明るく一つは暗かつた。

『なんて可哀さうにな、此寒いの子守も暗いわ』
『眞んにねえ、あら彼様に泣く、知らねで居るんです』
べか彼様に泣くのに……』
針の手を運ばせ乍ら、うつむいた儘で嫂は猶云ふ。

『でも彼家で、子守を置くのが不思議ですわね』
前髪の毛すちを通して根に植ゑた櫛のあたり、今朝結ふた髪格好宜さを眺めて、私は一語も發しなかつた。

炬燵の周圍に立てた小屏風には、祖父が道樂の發句仲間の書簡が表装してある。古風な繪入れや茶色などの奥床しい紙に、太い字細い字様々な、静夫様と祖父が俳號はいづれも大きく、後には一二句、或は三四句、私等には讀め難い達筆である。池水に輪の廣がるや落椿、と私はいつものやうに、讀めるとこだけ讀んで見た。猫の爪あとさへ見える此屏風を見る度、私はいつも幼なかつた昔の冬の夜を思ひ出すのが常であるが、今夜も種々な昔のことを思ひ出して居た。泣く兒の聲が段々遠ざかつて行くのに氣が付いて、疲れたやうな其泣く聲に暫らく耳を傾けて居たが、私はふと其加登屋の光さんのことを思ひ出した。暗い其家と思ひ出した。

(子買はふく)
 (今夜にしましよ)
 (砂糖や饅頭)
 (そら虫の大毒だ)
 (魚飯かけて)
 (魚に骨ある)
 (身どつて進上)
 (そんならよかるがどの子を取りやろ)
 (……お秀ぼつこ取つりやろ……)
 (加登屋の店には子が四五人、私も無論其一人) 向ひ
 の八百屋の縁側には親が一人、其間の鬼に捕まるまい
 と、買はれて行く子が逃げ叫ぶ聲に、夕暮れの街はい
 つも賑かであつた。恁んな時に光さんは、いつも重ね
 た種箱のかげから半身を現はして、兩手を帶の間に
 さんで、他愛もなく貰ひ笑しながら突立つて居るのが
 常であつた。
 加登屋は二間々口の小さな店で、荒町通りの角にな
 つて居るので、前には郵便兩が立つて居る。其郵便兩
 の上に差しかけた竿には、幾年か雨風に曝されて色褪
 せた旗……種もの、看板が揺々して居る。人參の赤い
 のも、蕪の葉の青いのも、それはみな昔のこと、今は

幽かに形が見えるばかりである。稍々奥の硝子戸棚の
 中には、青や赤や、茶や紫や交り色の毛糸などが積ま
 れて、(それも色褪せて) 其前には、斜にたてかけた板
 に、細かく仕切つた種もの、箱が並べられてある。茲
 に若し客があつたとすれば、薄暗い奥から應へと共に
 顔の大きいチヨン醬の、せむしの老爺さんが腰に手を
 かけて出て来るのである。客の仰せをかしこまつて、
 古新聞紙を下長く三角に張つた袋に、小さな樹で種を
 入れて、上を丁寧に捻つて渡す。歸る時には有難うご
 ざりやす、とお辭儀の三つは大丈夫したもの。荒町口
 に面した方には、簀一並笠一重ね、高帯四五本に草
 簀の一束、目籠もあれば草鞋も下つて居る。店先には
 つくねんと眞鍮の火鉢が一つ、つめたくなつた時には
 其胴を抱いて、私はよく鴨居に張られてある千代萩の
 古びた錦繪を眺めたものだつた。
 「光治く、何してんだい、暗くなつたぞい、戸を締
 めなんしよ、戸を締めなんしよ」
 後から追ひかけられるやうな爺さんの聲にせきた
 てられて、惘然私等の遊びに氣を奪られてゐた光さん
 が動き出す頃は、店々の前に簀目の跡清く、暗い加登
 屋の其奥にも、ほつちりとした灯が點されるのであつ

夜の緑日 (甲寅)

麻布 生駒翠山



夜の緑日

29

堅いで通つた加登屋の老爺さん、名は米藏と云て、鍋の蓋に、何年何月何日需之、代價幾何とでも書き兼ねない位の人であつた。その昔、燈明のまだ豆ランプに變らぬ頃、或夜私は唐心を買にやられたことがあつた。すると老爺さん眞面目

な顔して、夜は唐心と云はすに、瘦せ男と云ふべきことを教へたことがあつた。家に歸つて聞いて見れば、昔は夜、火早いもの、名をいふことを嫌だのたといふことがわかつて、今更ながら爺さんの物堅いのに呆れたことがあつた。

伯母さんは顔色の青い、背の低い、目の下に大きな黒子のある、滅多に口をきいたとのない人であつた。光さんには一人の姉妹がある。お登和と云つて今年三十六の今だに獨り身。爺さんの子、翁さんの娘のお登和さんは人嫌ひである。お登和さんは學校を知らない、町を知らない、自分の家の圍の外の外は知らないといふ謂つても宜い。十六の年、お婿さんを貰つたのださうであるが、お婿さんは暗い家を嫌つて間もなく出てしまつた。

さすがに光さんは學校に通つた。中途で廢すは廢したもの、請取書くには餘りあつた。月日は用捨なく流れて、一時町の人を驚嘆した加登屋の土藏普請も荒打ちすんで一きまり着いた時、忽然爺さんは脳卒倒で斃れた。無口な人や人嫌ひな人の手に、どうして爺さんの遺業を仕遂げることが出来るやう。藏は荒土の儘足場も取れずに二年は過ぎた。

明日から、光さんの姿は見えなくなつてしまつた。一座の中には常町の、或る藥種店の三番息子が、座長の次席を占めて居たのである。

いつからともなく加登屋の店に見えて、いつからともなく加登屋の嫁と認識された嫁さんは、額のせまい強い顔の人である。

髪は薄くなつても銀杏返し形の髪は變らず、手拭を袷に巻いたお登和さんは、相變らず暗い家に生きて居る。

暗がりに育てられて暗きに馴れたお登和さんは、光線を嫌つて闇にかくれ、同じく暗きに育てられた光さんは、ふと見た光線に慄れて、遂には暗を逃がれて強い白光に走せたのである。

暗い此家から引いた二線の、白と黒との間の線は、横に一線引かれた或る色と交へて、そも如何な色に染められるであらう。

光さんの子は女である。

呼び起されてふと目を覺ました今朝、積りに積つた雪は、屋上七寸と小僧が言ひました。家の兩側にうづ高く積まれた雪の山、都の人に見せたら何といふ

荒町一町に人山を築く盆の草市や、年暮は破魔弓羽子の板の市の賑かさを、光さんは店に懷手で眺めて居た。それを叱る人もなく、伯母さんは伯父さんのあとを逐つて居た。

隣の茶屋で水を濁ぐ夏の夕べは、光さんは暗い棚のかげに隠れて横笛を吹いて居た。

向ひの八百屋の軒近く蜜柑の箱は積まれても、光さんは水に上つて轉んだ人を見て笑つて居た。

一秒毎に變り行く世のさまも、一日二日には見ることも出来ないが、一年二年三年と積んでは、さすがに顧みて驚かれる。人口の増加は幾分か知らず、小さな此町にも、家並美しく電氣がついたのでも知れやう。

まづ手近かなところで光さんの顔の目鏡、飛白の羽織と形に現はれるまで、心は世と共に變つて居た。

前評判の大層な何々一座がいよいよ乗り込んで、今日は其顔見世と、太鼓の音勇ましく、車を連ねて町を練る俳優の、白い顔、艶かな髪、紋付の腕組み、さて

は明日の解題をふれ歩く流るゝが如き辯舌を見惚れ聞惚れ、羨むまで、光さんの心は新らしき風に吹きすまされて居た。

此一座が非常な喝采を博して、一週間でひきあげた

でせう。子供達はたつべ(雪すべり)をこしらへて居ます。昨夜あまり夜更かしをしたので今朝は少々風邪心地。(廿二日朝)

忍冬酒 (二等)

但馬國朝來 尾知山靜波
郡東河村

驛から驛まで、僅に十五分間ではあるけれども、私は非常に長いやうに思はれてならぬ。それに外套の襟を立ててゐても、何となく首が縮まるほどに寒い。日が暮れてから、もう一時間にもなるだらう。いつも役所の机にはばかりかじりついてゐて、空腹を感じたことは滅多にないが、けふばかりはおそろしく腹が空いたやうな具合だ。と思ふと、尙更早く歸つて緩りと温かな飯が食ひたい。火鉢の炭火が白うくづれて灰になつてゐるだらうか、こんな日に暮らしたから、宿ではもう歸らぬもしれぬなどと思つて居るかもしれぬ。しかしお静さんだけは屹度待つて居るに極つてゐる。そして、毎日のやうに、あの太和炬燵を隅の方に置いて、